



宮崎 吾朗さん
Goro Miyazaki

昭和42(1967)年、東京生まれ。信州大学農学部森林工学科卒業後、建設コンサルタントとして公園緑地や都市緑化などの計画、設計に従事。その後、平成10(1998)年より三鷹の森ジブリ美術館の総合デザインを手掛け、13(2001)年より17(2005)年6月まで同美術館の初代館長を務める。平成16(2004)年度芸術選奨文部科学大臣新人賞芸術振興部門を受賞。平成18(2006)年『ゲド戦記』でアニメーション映画を初監督。23(2011)年夏公開スタジオジブリ映画『コクリコ坂から』で監督を務める。公益財団法人徳間記念アニメーション文化財団理事。

方々ですね。
宮崎 そうです。生活の感じとか、高校生の男女関係はどうなっていたのかとか聞きたいな。それが最初の手助けになりましたね。写真や卒業アルバム、ラブレターまで見せてもらいました。
清原 そんな素晴らしい時代考証があったので、さて、アニメーションの演出とはどのようにするのですか。
宮崎 監督にはいろいろなタイプがいます。宮崎駿はものすごく主観的。極端に言えば主人公と一心同体となる。対極なのは高畑勲です。引いたところから冷静に観察して、ドキュメンタリーのように作品を創っていく。
清原 吾朗さんはどちらですか。
宮崎 どちらでもありません。今回の作品では、宮崎駿が書いた主人公がどんな人物であるかを理解しようとした。分からない人のことを理解しようとするプロセスが映画づくりそのものです。1、2メートルの距離感で主人公を見ているような感覚です。
清原 そうやって感じたことをスタッフに伝えるんですね。
宮崎 思ったのは美術館づくりをやっておいてよかったということ。建築にしてもアニメーションにしても、何を創りたいかを制作スタッフに伝える



映画づくりをやめてしまえば
思い出美術館になってしまう

なければならぬ。言葉で説明したり、絵を描いたりしながら、自分が行きたい所を示す。きちんと伝えなきゃいけないというのは、どちらも同じです。それに我慢することも覚えさせましたね。
清原 市政にも共通しますね。市長にどんなに強い思いがあっても、実際に活躍してくれるのは市民の皆様であり、市の職員です。イベントひとつにしても市民の皆様の参加と協力なしでは実現しません。ですから、最近では映画を見るにしてもエンドロールが気になるようになってしまいました。こんなに多くの人が関わっているのかいつも感じしますよ。
宮崎 少ない人数でできれば、それに越したことはないんですけどね。
清原 ところで、そんな映画づくりをしているときに、気分転換はどのようにされるのですか。学生時代に長野にいらしたから、やはり山登りや高原などに行かれるのですか。
宮崎 行きません。行っても楽しめないですよ。頭の中は映画のことだけです。仕事の悩みは仕事でしか解消できない、と思いますよ。
清原 それは私も同感です！
清原 吾朗さんは三鷹市にどんな印象をお持ちですか。
宮崎 三鷹って、東京の波打ち際だと思ってるんです。三鷹から東に行く都心。西に行く多摩地域ですよ。ちょうど浜辺みたいじゃないですか。都会的な香りと田舎っぽさがちょうどいいバランスのエリアだと思っただけです。
清原 波打ち際って、いい表現ですね。その個性をこれからも守り、磨いていきたいですね。三鷹市に期待することや提案することはありますか。

宮崎 『コクリコ坂から』を創っているときに、コラムニストの天野祐吉さんが『昭和30年代は本当にいい時代だった。それ以前は戦争で血まみれで、それ以後は金まみれになっていった』と新聞のコラムに書いていたのを読みました。
清原 昭和30年代は『コクリコ坂から』の時代ですね。
宮崎 その時代の、大事にしなければいけないものがあると感じました。映画を創るのにずいぶん当時の写真を見ましたけど、当時は、建物を建てること、とりわけ小学校なんて建てるのは地域の誇りだった。子や孫の代まで続くものを残したいという思いがあった。人が暮らしていくことは、暮らしを継続していくことです。それはまさに行政の仕事でもある。変えることが大事だと言われていた時代もありましたが、今はそれを見直さなければならぬと思います。
清原 そうですね。三鷹市では第4次基本計画をまとめつつあって、その軸として『都市再生』と『コミュニティ創生』を置きました。最近では東台小学校の耐震建て替えをしたのですが、その時は児童、保護者や教職員、地域の人々に意見をお聞きしました。その結果、建物の高さは低くなり、太陽光発電や屋上緑化を取り入れられました。みなさんのご意見を聞くことにより、最先端の建物というよりは、居心地のよい建物に落ち着いたんです。
宮崎 三鷹市は意見を聞いて話し合い、可能性を探っていくというのがベースにある。それはすごく大切です。行政任せでは無理だし、予算をどんどんかければよいというわけではありませんからね。
清原 吾朗さんはこれから、三鷹市との関わりをどのようにお考えですか。
宮崎 僕はジブリ美術館がずっと続いていけることが何よりも地域への貢献だと思っています。



対談日、絵コンテ室に展示されていた映画『コクリコ坂から』の絵コンテ。作成に一番時間がかかったという絵コンテは何冊にも及ぶ。



す。そのためにはスタジオジブリが続いていかなきゃいけない。映画を創るのをやめてしまえば、途端にこは『思い出美術館』になる。美術館のスタッフがどんなに頑張ったところで、衰退に向かっていくことですよ。継続を考えれば、スタジオジブリにも続いてもらわなきゃ困る。『ゲド戦記』の企画に最初、オプザーバーとして参加したのは、美術館が続いていくには若い世代の監督が出てくる必要があるし、応援したいと考えたからです。いつの間にか自分が監督をやることになってしまったわけですが(笑)。
清原 続けていくことの大切さですね。三鷹市も『ステナブル都市』を目指しています。持続可能であることを当たり前のものとせずに、職員と専門家が一緒になって自治体経営を考えていくことに取り組んでいます。ジブリ美術館も、吾朗さんが館長から監督になったことで、継続性が高まっていくことですね。
宮崎 いろいろなものが過去にならないようにしていかなければならないと思っています。
清原 では最後にもう一つ。今年はどうなことに挑戦されますか。
宮崎 まだ内緒ですが美術館である企画を仕込んでいます。ちょっとそれ以上は言えないので、今日は本当にありがとうございました。

注釈

宮崎駿(みやざきはやお)：日本を代表するアニメーション映画監督。監督作品に『風の谷のナウシカ』『となりのトトロ』『もののけ姫』などがある。『千と千尋の神隠し』では、アカデミー賞長編アニメ賞などを受賞。ジブリ美術館館主。三鷹市名誉市民。
高畑勲(たかはたけいさお)：アニメーション映画監督。監督したアニメーション作品に『ジャリン子チエ』『火垂るの墓』『おもひでぽろぽろ』『平成狸合戦ぽんぽこ』などがある。宮崎駿の先輩であり盟友。
鈴木敏夫(すずきとしお)：アニメーション映画プロデューサー。昭和53(1978)年、徳間書店でアニメ雑誌の編集者をしていた時に宮崎駿に出会い、『風の谷のナウシカ』の映画化に尽力。昭和60(1985)年のスタジオジブリ設立以後は、全作品のプロデュースを手掛けてきた。
『コクリコ坂から』：平成23(2011)年公開のアニメーション映画。昭和38年の横浜を舞台に、まっすぐに生きる少女『海』や、その両親たちの親子2世代にわたる青春を描く。作中に登場する洋館『カルチャータン』はジブリ美術館内の中央ホールの吹き抜けが参考になったという。企画・脚本、宮崎駿。



企画展示 『ねこバスから見た風景展』 絶賛開催中!

“みたか”行きの大きな「ネコバス」。車窓からは「となりのトトロ」の風景が、続く展示室では「耳をすませば」「千と千尋の神隠し」などで描かれた風景が広がります。ジブリ作品の背景画の魅力が楽しめる展示です。

日 平成24年5月まで(予定)
所 三鷹の森ジブリ美術館
(下連雀1-1-83、入場は日時指定予約制)
問 同美術館ごあんないダイヤル
☎0570-055777
(休館日を除く午前9時～午後6時)
HP <http://www.ghibli-museum.jp/>



©Museo d'Arte Ghibli
©Studio Ghibli